
曇天

甘露門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

曇天

【Nコード】

N01770

【作者名】

甘露門

【あらすじ】

いけてない中学生のいけてない物語です。中学生だった頃を思い出して読んで頂ければ幸いです。

1・入学式

昼休みになってもひたすら絵を描いてるようなやつ。大抵クラスに一人はいるだろう？僕はそんな感じのやつだと思ってくれたらいい。

小学生まではそれでよかった。あの頃はみんな、休み時間はもちろん、授業中だってカーテンに包まったり、かめはめ波とか打つちやったり、突拍子もなく音痴な歌を歌いだしたり、自由勝手にやっていた。

僕なんかは、黒板におかしな落書きを描いて、みんなを笑わせていた。もちろん当時の担任の先生は僕のことを叱って、黒板をキレイにしろと命じたけど、「黒板じゃなくこれに描け」、と画用紙をくれた。

僕は家に帰って一生懸命、もらった画用紙に絵を描いた。次の日に先生に見せたら、「上手いな」、と一言誉めてくれた。ありふれた褒め言葉だけど、白々しさがなく、僕は心が踊った。

こんな感じで、小学校の頃の僕は、おちゃらけていつもみんなを笑わせていたし、先生とも仲がよかったし、人気者とまではいえないが、クラスの中心人物の一人だったと思う。

中学校に入ってからは何もかもが違った。

まず入学式で、僕は萎縮した。母親や、小学校の友達の親子が視界に入っているうちは期待さ、不安さといった割合の心境だった。

やがて保護者と別れ、式が始まった。場内が静かになり、僕の心の中の期待の割合は小さくなっていった。そして後のクラス順に並ばされた時、同じ小学校のやつが近くにいないことに、さらに不安になった。

教室に移動してみると、僕の配属されたクラスには、やっぱり小学校の頃に仲が良かったやつはいなかった。同じ小学校だった女子を発見したが、話しかける程の仲ではない。僕は不安を募らせながらも友達を探すのをあきらめて、自分の名前が書かれた紙が貼つてある席を探した。他の連中も落ち着かない様子で、おそらく同じ小学校の友達や、自分の名前が貼られた席を見つけては安堵していた。殆ど全員が席に着き始めてからしばらくすると、先生らしき人が大量のプリントと教科書の山を持って教室に入ってきて、「ちよつと、何人が運ぶの手伝ってくれない？」と言いながら僕達に手招きをした。

すると、前列のほうの何人かが席を立ち、プリントや教科書を教卓の上に運ぶのを手伝った。僕は席は後ろのほうで、頼杖をつきながらぼーっとしていた。僕の思考回路がようやく「手伝わなきゃ」という考えに達した時には、もう作業は終わっていて、手伝った生徒達は席に戻っているところだった。

手伝った人達が席に着く様子を見ると、小学校以来の、黒板にチョークで何かを書く音が聞こえた。

「みなさんの、この1年7組の担任を受け持つことになった田村恭子」《たむらきょうこ》です。みなさんよろしく願います。」

黒板に大きく自分の名前を書き終えた先生らしき人、改め田村恭子先生は振り向いてそう挨拶し、中学校になったばかりでそわそわしている僕達に向けた歓迎の言葉と、学校のカリキュラムなどの話をした。

先生が話を終えて、プリントや教科書を配り終えた後、「それでは一人ずつ前に出て、自己紹介をしてもらいましょう。」と先生が提案した。

はつきりいって、自分の番までの人の自己紹介は頭に入らなかった。何を話そう？名前と出身校だけでいいのかな？と話す内容を考

えるだけで精一杯だった。

僕の番がやってきた。立ち上がって、教室の前のほうへと歩き出す。一步踏み出す度に膝がガクガクする。ふと、田村先生と目が合う。先生はニコニコしながら、さあ、と促すような眼差しを返してきた。教壇に上がって、みんなのほうを向く。教室にいる全員の、知らない人ばかりの視線が僕に向けられる。そして僕は自己紹介を始めた。

「あやしのりゆきです。」

あつ！今『あやし』って言っちゃった！『林紀之一』《はやしのりゆき》、『はやし』なのに・・・！

上手く舌が回らず、『は』が『あ』になってしまった。どうしよう、言い直すか？でも、早く終わりたい・・・。

顔が赤くなっていくのを自分で感じた。鼓動も大分速くなっている。

「出身校は。。。小です。よろしく願います。」あつ最後も少し囁んだ。

結局、名前は言い直さず、礼をしてそのまま顔を伏せた状態で席に戻った。席に戻るまでに浴びる視線と、まばらな拍手が、僕の羞恥の後味を長引かせた。

僕の後の人達の自己紹介が続いている中、僕はそれを全く聞かずに、まだ残っている恥ずかしさを紛らわせようと窓の外を眺めていた。空を見上げる。空は、くすんだ灰色一色に染まっていて、今にも雨粒が落ちてきそうだった。

中学校登校初日、僕は同じ小学校の友達、佐藤亮介と一緒に登校した。

小学生の時の亮介は、僕と一緒にクラスの中心に居て、クラスで起こる笑いは、大体亮介と僕によるものだった。

亮介は運動神経抜群で、バスケットに入っていて、センターだった。クラスでやるドッジボールやかけっこも得意な奴だ。運動も出来て面白い。当然、女子からモテていた。僕は面白い絵を描いて、亮介はその身軽さで、派手なりアクションをとって笑いを起こしていた。別の誰かが、「二人合わせたら、芸人になれるよ。」と言っていた。しかし、僕も亮介もそれに調子を良くして、自分の面白さに対して自信過剰になることはなかった。僕は僕のやりたいようにやっていただけだ。他人を笑わせようという意図はもちろんあったが、第一には何も考えていないで身体が勝手に動いていた。それは亮介も同じだったと思う。僕達は波長が合い、いつも一緒に遊んでいた。小学校を卒業してからも、それは続いている。

初めて歩く中学校への通学路の景色に新鮮さを感じながら、二人横に並んで歩く。

「ノリは何組だった？」

小学校の時の僕のあだ名はノリ。亮介はリヨウ。同じ小学校の大体のやつがそれぞれをそう呼んでいた。多分、中学でも誰かと仲良くなったからには、そう呼ばれることになるだろう。

「7組だよ。」

「7組？一番端かあ。」

「リヨウはクラス、何組だった？」

「3組。ケンちゃんとかユッキーとかがいたよ。」

「いいな。僕のクラス同じ小学校の男子、一人もいなかったよ。」

「そうなの？でも俺、ケンちゃん達と話していたら、K小のやつが

話かけてきて、仲良くなったよ。」

「そうなんだ・・・。」

「ノリは？誰かと仲良くなった？」

「いや、まだ誰とも話してない・・・。」

「そっか。・・・そうだ、休み時間、ケンちゃん達とノリの教室行くよ。」

リヨウは僕の性格をよく知っている。僕はその場に慣れれば自分の抑制を解き、おちゃらけだす。でも、慣れるまでは引込み思案なのだ。僕は新しい場が苦手なのである。そのことを氣遣ってくれたのだ。

「ああ。ありがとう。」

学校に着いて、僕達は入学式の日に教えられた一年生用の下駄箱の前で、自分の靴を入れるべき棚を見回したり、背伸びをしたりしてようやく見つけた。

そして僕達は一年生用の教室が並ぶ二階に上がり、階段を上がってすぐの1年3組の教室の前で別れた。

教室に入っただけでリヨウは、早速「おつす。」という感じに片手を挙げていた。そんな様子を横目に、僕はリノリウムの廊下を一番端まで歩く。僕のクラス、1年7組は、学年全7組分けの7つ目ということ、一番端に位置していた。俺も明日は、リヨウみたいに教室に入っただけで、誰かに挨拶できるかな？ そんなことを考えていたら、もう7組の教室の前に辿りついていていた。

緊張して、足が重く感じる。勇気を出して、教室の中へ鉛のような足を進めた。

先に到着していた生徒達が一齐に、教室に入ってきた僕を見る。だが、それはほんの一瞬で、それぞれ視線をもとの位置に戻す。

視線から解放された僕は、鼓動が速くなりつつも自分の席に向かう。あった、僕の席。入学式の日貼ってあった名前はまだ貼られ

ていた。

ようやく席に着いたはいいものの、早速、迷いが生じた。まだHRが始まるまで十分程ある。それまで何をしよう？このままじっとしているか？無理だ。僕は何もせずじっとしているのが苦手だ。どうしよう？

そこで、誰かを参考にしようと、教室を見渡した。

僕の視線は教室の端からゆっくり横へと流れていく。友達と話しているやつ、会議中のおっさんのように手を組んでじっと席に座っているやつ、本を読んでいるやつ……。あ、そうだ、HRの前にあるらしい「10分間読書」のために持ってきていた小説を思い出した。これを読んでみよう。

小説、というか文字だけの本というと、「かいけつゾロリ」ぐらいしかまともに読んだことがない。あつてもゾロリは挿し絵がついてたっけか。あとは、小学校の図書室にあった「はだしのゲン」や「キャプテン」といった漫画しか読んでいない。思い出してみれば、僕は文字だけの本を読んだことがなかった。

持ってきた小説も、姉の部屋の本棚に並べてあった書物の中から、グロテスクなタイトルに引かれて持ち出してきた推理小説だった。僕は鞆に手をつ込み、その小説を取り出した。

読みはじめると、やっぱりつまらない。一行をかなり時間をかけて読む。というか、読み慣れていないから、必然的に時間がかかる。次の行に進むと、先程読んだばかりのことばが全く同じ順番で綴られている。僕はこの本に、印刷ミスなのかと一瞬疑問を抱いたが、それはただ、次の行に進んだつもりの方が、さっきの行をまた読んでしまっただけだということに気付いた。

このような失敗を何回か繰り返して、ようやく一頁読み終えたころには、精神的エネルギーを大量に消費していた。

二頁目にして、もう読む気が完全に無くなっていたところに、「面白そうな本読んでるね」と先程見渡した時に友達と話していたうちの一人が僕に話しかけてきた。

「あつ・・・えつと・・・」

「おれ日村翔吾。君のうしろの席なんだ。よろしくな！えーつと、林くん！」日村くんは僕の名札を見ながら、微笑みかけてきた。

この時、僕が犬だったら、さぞシッポがブンブンと揺れ踊っていたことだろう。

「こ、こちらこそ、よろしくー！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0177o/>

曇天

2010年11月28日16時55分発行